第４章　自然的調査

第１節　地質と地形

１．満濃池及び周辺の地質の特質

満濃池は丸亀平野西部を流下する中規模河川の金倉川の上流域に位置する。金倉川は、徳島県との県境付近を東西に延びる讃岐山脈から派生する。満濃池は、金倉川が讃岐山脈を下刻することにより形成された開析谷の出口の狭窄部に堤体を構築することで広大な水面を造り出す。堤体以外は、自然地形である丘陵が堤体の役割を果たしている。堤体から南東方向を望むと、広大な水面と周囲の山容が一体となった風致景観が広がる。ここでは、この風致景観が形成されるに至った地質的要因について、既往の研究(Sangawa1978. 古市 1984. 長谷川・斉藤 1989. 植木・満塩 1998. 長谷川・鶴田 2013)を参照しながら説明を行う。

満濃池周辺の基盤地質は、背後の讃岐山脈が和泉層群(白亜紀最後期約 7000 年前)、周囲の丘陵は領家花崗岩類(白亜紀後期 8000 万年前～9000 万年前)から成り立っている。堤体の基盤面及び両側の丘陵は領家花崗岩より形成されているが、それ以外の水面周囲の丘陵は領家花崗岩の上に三豊層群財田層が覆っている。三豊層群財田層は、第四紀の河湖成層であり、和泉層群に起因する砂岩礫・泥岩礫に加えて三波川変成岩類の片岩礫を含む。このうち、三波川変成岩礫は、四国山地から供給されたと考えられることから、三豊層群財田層が堆積した 120～210 万年前には、讃岐山脈が未だ隆起しておらず、古吉野川が香川県側へ流入していたと推定されている(Sangawa1978)。

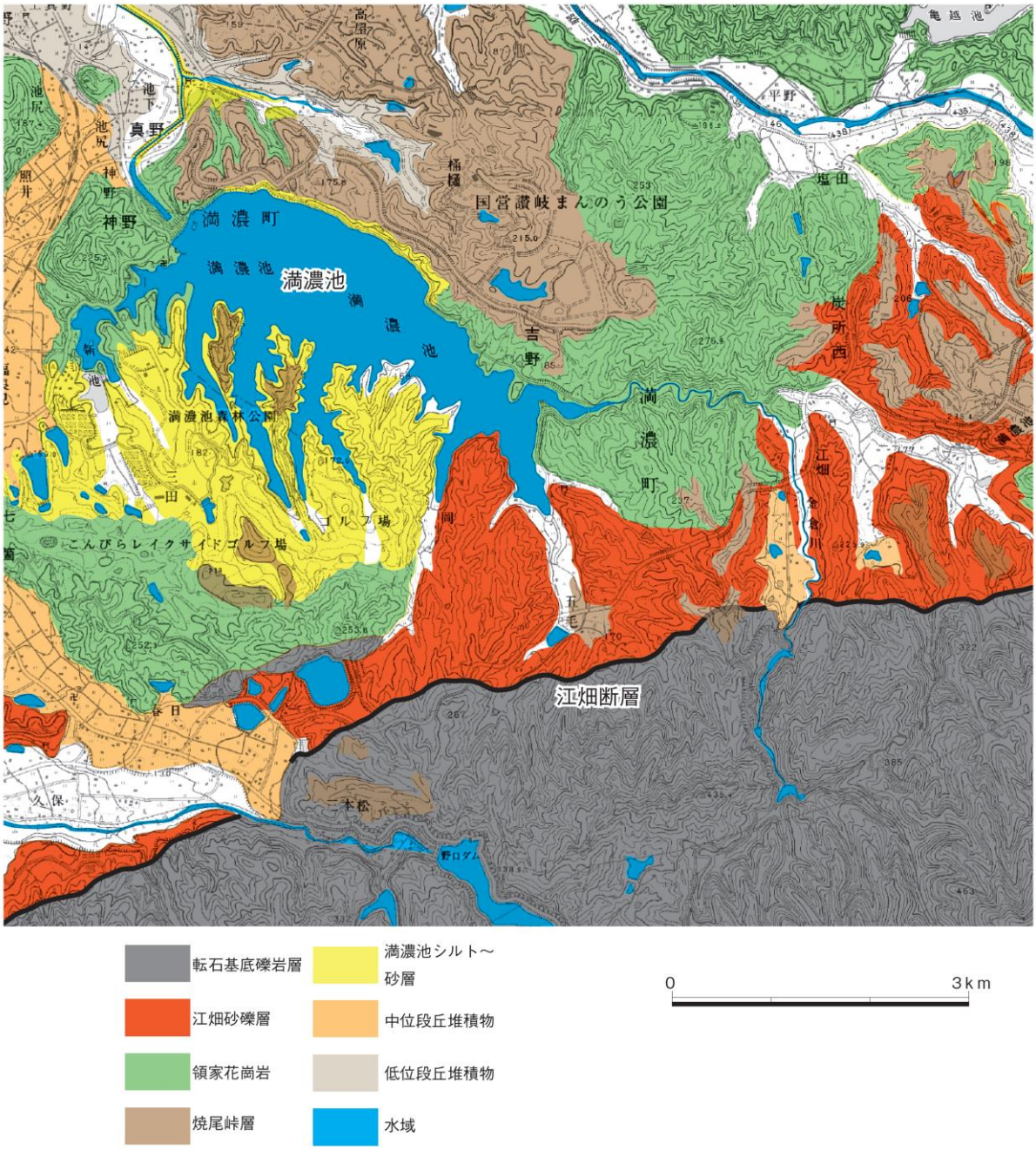
更に、水面周辺の三豊層群財田層は、南岸が砂層、粘土質シルト層、花崗岩小・中礫を主体とする満濃池シルト - 砂層(古市 1984)、北岸は満濃池シルト - 砂層の上位に和泉層群に由来する礫を主体とする扇状地性礫層である焼尾峠礫層(斉藤 1962. 長谷川・斉藤 1989. 古市 1984)が分布するなど、水面の南岸と北岸で表層地質が異なることが指摘されている。

池岸の地形は、南岸が複雑に入り組んでいるのに対して北岸は直線的になるなど、対照的なものとなっているが、これらは南岸の満濃池シルト - 砂層と北岸の焼尾峠礫層の層相や固結度等の相違が、開析作用の進行度として反映された結果であると考えられる。

背後の讃岐山脈は、前述のとおり和泉層群によって形成されているが、池奥の五毛・江畑地区で東西の直線的な境界をもって急激に立ち上がる。この境界には江畑断層が存在しているために直線的な地形境界を成して讃岐山脈の急斜面へ移行している(Sangawa1978. 植木・満塩 1998. 古市 1984. 長谷川・斉藤 1989)。

江畑断層は、約 40 万年前から 120 万年前の焼尾峠礫層に覆われていることからみて、数十万年間は断層活動を行っていないと考えられている(長谷川・鶴田 2013)。この江畑断層の存在により、

視点場である堤体から南東への眺望は、三豊層群からなる広大な水面の周囲の比較的なだらかな丘陵に対し、背後の讃岐山脈が直線的に立ち上がるという、対照的な山容美が造り出されたと考えられる。低丘陵と山脈のみの組み合わせであれば県内の他地域でも見ることができるが、満濃池の場合は広大な水面を介することで一体的な風致景観が創出されている。



第11図　満濃池周辺地質図

2．満濃池の地形

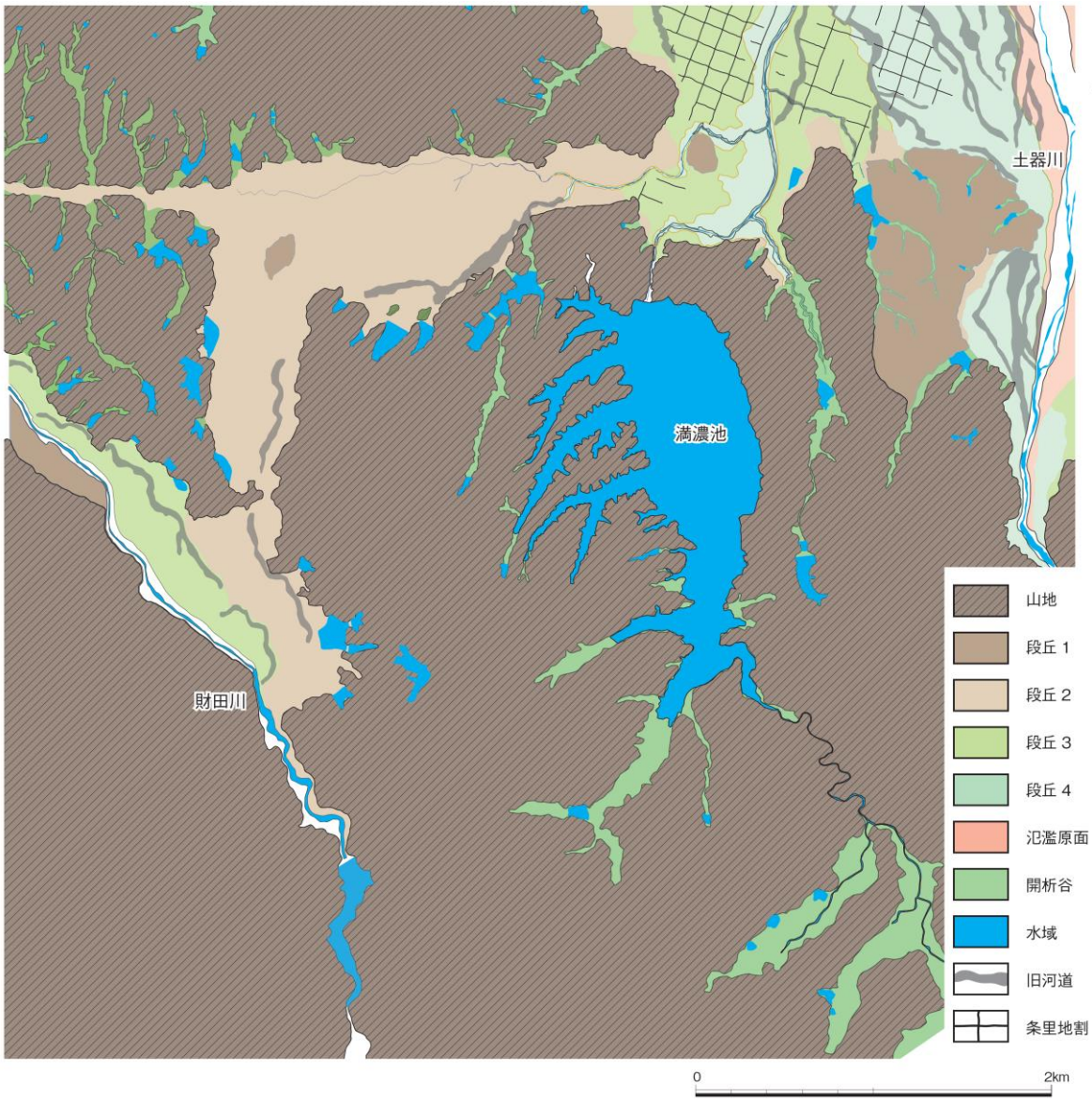
前述のとおり、満濃池は讃岐山脈から派生した金倉川によって形成された開析谷を利用して築造されている。また、満濃池に流入する河川は、小河川を除いて金倉川のみであるが、東側には

同じく丸亀平野の主要河川である土器川、西側には香川県西部の三豊平野へ流下する財田川が存在するなど、地形面の形成には河川の下刻作用との関係が深く関係している地域でもある。

ここでは、満濃池と取り巻く山地以外の地形面について、想定されるこれらの河川の開析順序を基にして、地形面を段丘１～４面に区分して説明を加える。

段丘１面は土器川左岸に分布し、下面の段丘２面の比高差は約 10mを測る。現状では多くが農地として利用されている。形成年代を示す資料は知られていないが、最も高位に位置付けられる段丘であるため、更新世段丘の可能性が高いと考えられる。

段丘２面は、福良見に財田川と満濃池が属する金倉川との間を繋ぐ形で所在する扇状地面の他、山地に付着する小規模な段丘を含める。福良見の扇状地には現状で明確な河川が存在していない。財田川の東岸に明瞭な段丘崖が存在することからみて、本来は財田川が金倉川へも流入していて、数か所に認められる旧河道はその痕跡と考えられる。その後に財田川の下刻が進行したことにより、段丘化したと考えられる（長谷川・鶴田 2013）。形成年代を示す資料は知られていないが、後



第12図　満濃池周辺地形分類図

述する段丘３面との対比から、更新世段丘の可能性が高い。

段丘３面は、主に満濃池堤体より金倉川下流側に広がる段丘面であり、同河川の下刻作用により段丘化したものと考えられる。福良見側の段丘２面とは 0.5～１m程度の小崖で画され、金倉川両岸に形成された氾濫原面との間には２～３mの崖が認められる。段丘上面には、丸亀平野に認められるN－30°Wの方位をもつ条里地割と弥生時代以降の遺跡が分布している。また、金倉川から派生したとみられる複数の旧河道が分布しているが、これらの埋没年代は明らかになっていない。弥生時代以降の遺跡が分布する点からみて、完新世段丘と考えられる。

段丘４面は、金倉川右岸部の段丘３面の前面(北側)に付着するようにみられ、段丘３面とは約0.5～１mの小崖で画される。分布範囲からみて、土器川によって形成されたと考えられ、同河川左岸の氾濫原面とは約１mの小崖で画され、段丘上面には条里地割が分布している。遺跡分布は明確ではないが、条里地割が分布していることから、段丘３面と同じく古代までには形成されていたと考えられる。

氾濫原面は、金倉川沿いの段丘３面と土器川沿いの段丘４面より下位の地形面である。条里型地割が分布せず、河川堤防が整備される以前には頻繁に氾濫の影響を被っていたと考えられる。金倉川沿いでは、段丘面との比高差が高く、段丘３面が形成された弥生時代以降も下刻と氾濫が繰り返されたと考えられる。

形成年代からみて、これらの地形面と満濃池との関係が想定できるのは、段丘３・４面、氾濫原面である。段丘３・４面には条里地割が分布することから、古代における満濃池の築造との関連も想定できる。満濃池周辺で条里地割の施工年代を示す考古資料は、買田岡下遺跡(香川県教委ほか 2004)の９世紀中葉の事例のみであるが、丸亀平野における複数の発掘調査事例(森下 1997)から、条理地割の施工は満濃池が築造された８世紀初頭まで遡ると考えられる。金倉川による山地の開析と主に段丘３面が位置する下流側への土砂供給、氾濫原面の形成に伴う段丘３面の離水が完了したと考えられる。

以上のように、更新世からの主要河川の下刻を経て、古代には満濃池の基盤となる開析谷の発達や潅漑域の段丘３・４面の段丘化にみられる河川の固定など、満濃池築造に必要とされる地形的な前提条件は整っていたと考えられる。(信里芳紀)

引用・参考文献

Akira Sangawa:Geomorphic Development of the Izumi and Sanuki Ranges and relating Crustal Movement Science Reports of the Tohoku University,Seventh Series (Geography),28,2,313-338,Faculty of Science,1978

長谷川修一・斉藤実 1989「讃岐平野の生いたち －第一瀬戸内類層群以降を中心に－」『アーバンクボタ No.28』

長谷川修一・鶴田聖子 2013「讃岐ジオサイト(26)満濃池と江畑断層」『讃岐ジオサイト探訪』

香川大学
古市光信 1984「香川県西部満濃町・琴南町の三豊層 - 四国北部新生代層の研究(その４) - 」香川県自然科学館研究報告第６巻
森下英治 1997「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『研究紀要Ⅴ 特集 ７世紀の讃岐』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香川県・徳島県 1972『土地分類基本調査 池田』
香川県教育委員会ほか 2004『一般国道 32 号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査買田岡下遺跡』
まんのう町教育委員会 2008「第２章 満濃池内調査の概要」『満濃池総合調査報告書』

第２節　現況調査

満濃池の風致景観は、主に堤体と広大な池面を中心に周辺の丘陵から構成されている。本節では風致景観を６つに区分して現況を説明する。

１．堤体

現在の堤体は、昭和 33 年(1958)に完了した第三次嵩上げ工事によるもので、土堰堤では珍しいアーチ式となっている。第三次嵩上げは昭和 15 年(1940)に開始され、戦争による中断を経て、昭和 33 年(1958)に竣工をみた。旧堤体の後法を埋める形で嵩上げされ、堤高 32m、堤長 155.8m

写真１　堤体より池面を望む 西より

写真２　堤体 北より

写真３　堤体 東より

写真４　堤体 西より

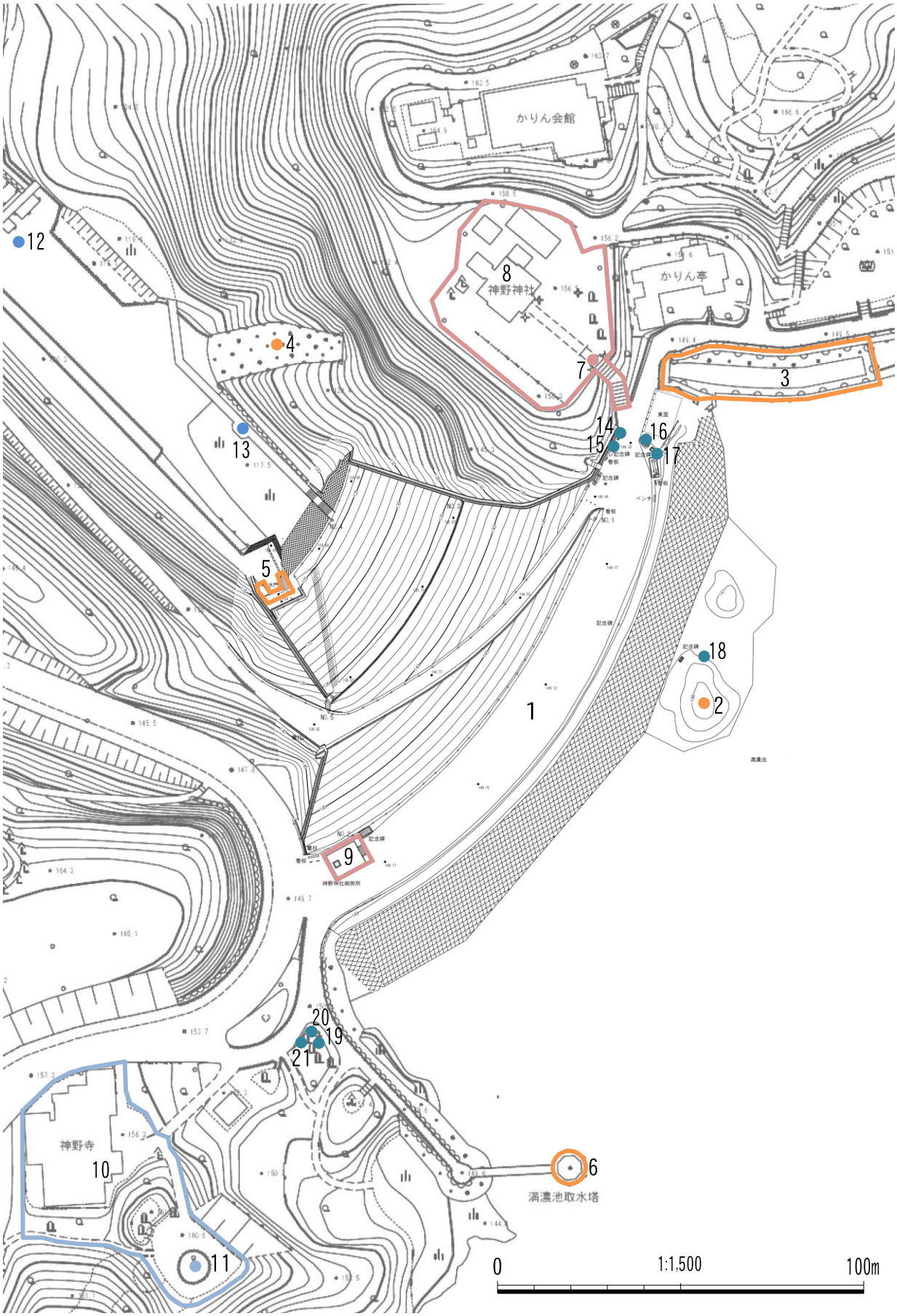
写真５　ほたる見公園 遊歩道 南西より

写真６　満濃池樋門 西より

写真７　満濃池余水放流工 南より

を測る。これにより、旧堤体は現堤体と水面下に埋没することとなったが、堤体北側の前方の水際には、旧堤体の右岸の取り付き部に利用された残丘が遺存しており、弘仁 12 年(821)の修築の際に弘法大師空海による護摩焚きの伝承をもつ「護摩壇岩」が所在している。堤頂は常時解放されており、来訪者が絶えない。堤頂から南東側を望むと広大な池面に対して両側に低丘陵、背後に讃岐山脈が広がる。江戸時代よりの風致景観は今も継承されている。

また、堤頂北の右岸側には、「真野池記」や「松坡長谷川翁功徳之碑」等の顕彰碑群や四阿、第三次嵩上げに伴う余水吐が所在している。



第13図　堤体測量図・周辺構造物位置図

堤体後方は、管理道が敷設され樋門周辺に通じている。現在の樋門(国の登録有形文化財)は、出口を花崗岩迫石により化粧され、幅 5.3m・高さ 4.485m、樋管幅 1.2mを測る。第三次嵩上げ(昭和 15～33 年)に伴うものであり、事業写真によると昭和 26 年(1951)頃には竣工していたことが確認される。毎年 6 月のゆる抜きの際には勢いよく池水が吐き出され、樋管前の減勢工(沈殿池)北側には、平成 3 年に旧満濃町によって木道が設置され、多くの見学者が訪れる。減勢工(沈殿池)右岸には、堤体右岸余水吐からの放水路がみられる。余水は、花崗岩盤がそのまま露呈している水路床を流下して、減勢工(沈殿池)へ流れ込み、あたかも滝のようにみえる。

2．堤体右岸

堤体右岸側には、神野神社を中心にかりん会館等の近年に設置された施設が所在している。神野神社は、「讃岐国名勝図会」によれば寛永年間(1624 - 1645)の再築時の「満濃池営築図」の旧堤頂南側に描かれた「池乃宮」に万濃池神、神野神、加茂神が相殿に祀られていたという。明治以降には、満濃池修築の功労者である松崎渋右衛門、長谷川佐太郎、和泉虎太郎、軒原庄蔵を合祀し、第三次嵩上げに伴い昭和 28 年(1953)に現在の位置に移転したもので、毎年「初閘抜き式典」が行われている。境内には、文明 2 年(1470)の銘をもつ石鳥居をはじめ、燈籠等の江戸後期の石造物が遺存している。現在の拝殿は平成 17 年に再築されたものであるが、本殿の築年は不明。堤頂南側には御旅所が設けられている。

番号	名称	備考
1	満濃池 堤体(写真1・2・3・4・8)	現在の堤体は昭和33年完了の第三次嵩上げ工事に伴うもの。
2	満濃池 護摩壇岩	空海が満濃池の修築に際し、護摩壇を設けて修法を行ったと伝わる。今では池中の小島であるが、第三次嵩上げ工事までは堤を見下ろす小山であった。
3	満濃池 余水吐 余水入水口(写真9)	昭和33年(1958)完了の第三次嵩上げ工事に伴い建設。
4	満濃池 余水吐 余水放流工(写真7)	昭和33年(1958)完了の第三次嵩上げ工事に伴い建設。
5	満濃池 樋門(写真6)	国の登録有形文化財。平成12年2月15日登録。明治2年(1869)、寒川郡富田村庄屋軒原庄蔵によって建設された底樋隧道とその出口。底樋の抗口周りには五角形の迫石を用い、石造のコーニス・袖壁・柱頭付端柱で抗門を飾る。樋門は間口3.5m、高さ4.2mで、底樋管の全長は197mである。
6	満濃池 取水塔(写真12)	昭和30年(1955)、満濃池第三次嵩上げ工事に伴い建設。
7	神野神社 鳥居	石造。文明2年(1470)建造。
8	神野神社(写真10)	正治元年(1199)、再建。第三次嵩上げ工事に伴い昭和28年、現在の位置に遷座。毎年、満濃池の「初閘抜き式典」を行う。
9	神野神社 御旅所	昭和61年(1986)10月に建立。
10	神野寺(写真13・14)	弘仁12年(821)、空海の創建の由緒をもち、昭和9年(1934)再建される。第三次嵩上げ工事に伴い、昭和30年(1955)に現在地に遷座。毎年、神野神社での「初閘抜き式典」後、豊水祈願の護摩が焚かれ制水弁が開かれる。
11	神野寺 銅像 弘法大師像(写真16)	昭和8年(1933)建立。香川の彫刻家、小倉右一郎作。
12	ほたる見公園	旧満濃町が平成3年、満濃池の堤体下に整備した公園。香川新50景に選定。
13	ほたる見公園 遊歩道(写真5)	旧満濃町が平成3年に建設。
14	石碑 真野池記(写真50)	矢原正照が明治8年(1875)9月に建立。父矢原正敬の撰文、題額染筆、息子正照の碑文染筆。
15	石碑 松崎渋右衛門辞世の歌碑	満濃池土地改良区が平成12年6月に設置。渋右衛門の末孫松崎正照の自宅、高松市片原町に建立されていたが、再開発事業により移転となり寄贈を受けたもの。
16	石碑 松坡長谷川翁功徳之碑(写真51)	昭和6年(1931)建立。題字は山縣有朋の揮毫、碑文選者は品川弥二郎、揮毫は衣笠豪谷、明治29年(1896)の執筆。
17	石碑 四国新聞社選定さぬき百景満濃池	昭和43年(1968)10月23日建立、明治百年記念。
18	石碑 護摩壇 歌碑	琴平神明會が昭和7年(1932)6月に建立。「護摩壇に修め志法のいさをしを萬代ま傳もたゝへまつらむ」覚祥作。
19	石碑 満濃池配水塔	満濃池普通水利組合が昭和6年(1931)建立。大正3(1914)年、赤レンガ取水塔完成記念。現在の台座の赤煉瓦は当時の取水塔の外壁に使用していたもの。
20	石碑 修拓記念碑	満濃池普通水利組合が昭和6年(1931)に建立。昭和5年(1930)、県営満濃池用排水改良事業(第二次嵩上げ事業)の竣工記念。
21	石碑 県営満濃用水改良竣工記念碑(写真62)	香川県が昭和36年(1961)4月に建立。第三次嵩上げ工事竣工記念。題字は津島寿一、撰文は知事金子正則。下部には池の沿革規模が刻まれる。

第13図添付　周辺構造物一覧

写真８　堤体上面北半 南より

写真９　余水吐 東より

写真10　神野神社 東より

写真11　かりん会館 東より

神野神社北側の丘陵には、平成元年から平成２年にかけて旧満濃町によって整備された、かりん広場やかりん会館、かりん亭などの施設が存在する。かりん会館には、満濃池に関する各史資料が展示され、屋外には嘉永年間(1848 - 1855)の修築に伴う石樋が展示されている。かりん広場は、展望デッキや四阿が設置され、堤体北側から南側を眺めることができる。

３．堤体左岸

堤体左岸には取水塔、お手斧岩、神野寺が所在している。大正３年(1914)に竣工した取水塔は、モルタル煉瓦積みの「赤レンガ取水塔」と呼ばれたものであったが、現在の取水塔は第三次嵩上げ工事に伴い昭和 30 年(1955)に竣工したコンクリート製のものである。取水塔は堤体左岸と渡塔橋によって結ばれており、写真や絵画に取り上げられ、満濃池を象徴する構図の一つとして定着している。

お手斧岩とは、旧余水吐工の底面の花崗岩盤である。明治 39 年(1906)の第一次嵩上げに伴い堤体北側に新たな余水吐がつくられた後も遺存していたが第三次嵩上げにより現在の堤体下に埋没したため、今は視認することができない。『讃岐国名勝図会』では「ウテメ」として堤頂にあった池の宮の南側に描かれている。その名の由来は、弘仁 12 年(821)の再築の際に弘法大師が岩盤を削り余水吐工としたが、その岩盤が手斧で削ったかのように平滑だったことに由来する。

写真12　取水塔 西より

写真13　堤体左岸 北西より

写真14　神野寺 東より

写真15　写し霊場 南より

写真16　神野寺弘法大師像 北より

神野寺は、堤体左岸の丘陵に所在する真言宗寺院で山号は五穀山と号す。現在の堂宇は昭和７年(1932)から９年(1934)にかけての「空海誕生千百年祭」の記念事業として再興され、第三次嵩上げ工事に伴い現在の位置に移された。『金毘羅山名勝図会』、『讃岐国名勝図会』では弘仁 12 年(821)の弘法大師空海の修築に伴い創建されたといい、『讃岐国名勝図会』は天正 12 年(1584)に長宗我部元親に焼き討ちにあったことを伝える。また、「神野寺跡」と呼び、今は古瓦が散布しているのみと現状を伝えて、『讃岐国名勝図会』の挿絵は、現在の位置よりも南西方向に離れた南岸に「神野寺跡」と注記している。

毎年６月の「初閘(ゆる)抜き式典」は、神野神社にて神事が行われる。その後、関係者は神野寺に詣で、護摩焚きによる豊水を祈願し、取水塔で満濃池土地改良区理事長により制水弁が開かれる。

また、神野寺境内東側には、昭和８年(1933)に「空海誕生千百年祭」記念事業の一環で建立された弘法大師像が立つ。製作は香川県出身の小倉右一郎の作であり、落成時には満濃大師會から記念絵葉書が出されている【資料 31】。神野寺南側の池岸には、四国遍路の写し霊場がある。設置年代は不明ながら、神野寺の再建と同様に昭和７年(1932)から９年(1934)にかけての記念事業で整備され、昭和 28 年の神野寺移転とともに現在の位置に設置されたと考えられる。

４．南岸

写真17　満濃池南岸 北西より

写真18　香川県満濃池森林公園 北より

写真19　香川県満濃池森林公園 桜の森 南より

南岸は、北岸に比べて浸食を受けやすい三豊層群財田層と呼ばれる砂層、粘土質シルト層、花崗岩小・中礫を主体とする満濃池シルト - 砂層から構成されており、入り組みの激しい汀線が続く(古市 1984)。複数の谷と半島状の出先は、「金毘羅山名勝図会」や「讃岐国名勝図会」の詩文において「八十嶋」、「九十九湾」と表現された箇所である。

南岸西半部は、香川県立満濃池森林公園の公園供用区域となっている。香川県立満濃池森林公園は、昭和 56 年(1981)に香川県県民福祉総合計画に基づき、満濃池周辺を森林公園として整備することが決定されたことを受けて、昭和 57 年(1982)度から用地買収と整備工事が実施され、昭和 63 年(1988) 5 月の全国育樹祭開催を経て、同年 6 月に供用を開始した。

通称「よもぎ谷」から「象頭谷」までの池面に突き出た丘陵は、「桜の森」や「野鳥の森」の教養施設として利用されている。これらは遊歩道で繋がれ、野鳥観察小屋の教養施設やトイレなどの便益施設が設置されている。

南岸東半部の通称「獅子谷」から以東にかけては森林であり、現在主だった土地利用がされていない。また、かつて池岸より南側はゴルフ場として利用されていたが、現在は太陽光発電施設用地に転用され、設備工事が進行中である。

5．北岸

北岸は、南岸とは異なり直線的な汀線が続き、池岸には池地管理道が敷設されているが、遊歩道としても利用されている。池岸西半部には、通称「蛇谷」と呼ばれる浅谷があり、「志度寺縁起

写真20　満濃池北岸 東より

写真21　満濃池北岸 歩行者専用道 東より

写真22　竜王社 東より

写真23　国営讃岐まんのう公園展望デッキ 東より

写真24　満濃池北岸 歩行者専用道 東より

絵 縁起文 第四巻 当願暮当之縁起」の蛇を祀った小祠「竜王社」がある。また、管理道途中には数か所の展望所が設けられ、変化に富んだ南岸池岸や堤体附近をみることができる。

北岸東半部は、国営讃岐まんのう公園の公園供用区域となっている。国営讃岐まんのう公園は、昭和 60 年(1985)の基本計画策定、昭和 61 年(1986)の都市計画決定を経て、昭和 62 年(1987)より用地買収と工事着手がなされ、平成 10 年に第一期開園を迎えている。北岸東半部は「湖畔の森」として平成 18 年に追加開園され、遊歩道や池岸に展望桟橋が整備されている。池地管理道と園地の境界には囲柵が行われ、同管理道と遊歩道が交錯する箇所については鋼橋が設置されている。

６．奥部

奥部は主要な水源である二級河川金倉川支流の中谷川との取り合い部となる。町道五毛線が敷設され鋼橋、丘陵法面工などの土木構造物が所在するなど人的改変が進んでいるものの、堤体からの眺望においては、途中、南岸東半部の丘陵に遮られ、これらを視認することができない。奥部南側の谷部には、数件の人家と水田が所在する。(中村文枝・信里芳紀)

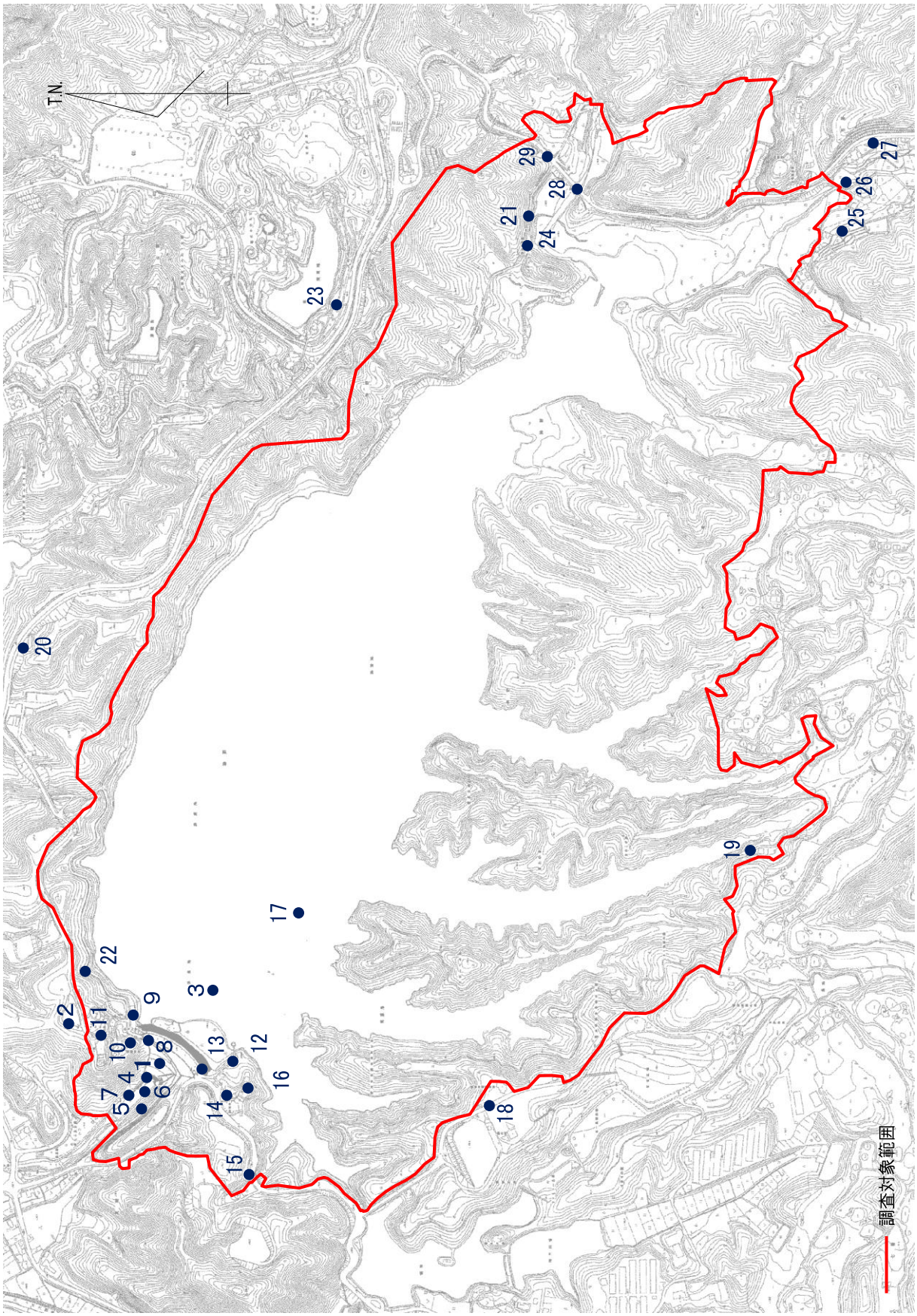
写真25　満濃池奥部 東より

写真26　中谷川河口付近 東より

写真27　五毛集落から見る満濃池 東より

写真28　金倉川（満濃池取水口） 西より

写真29　五毛大橋 北より



第14図　第２節掲載写真の撮影地一覧

第３節　植生

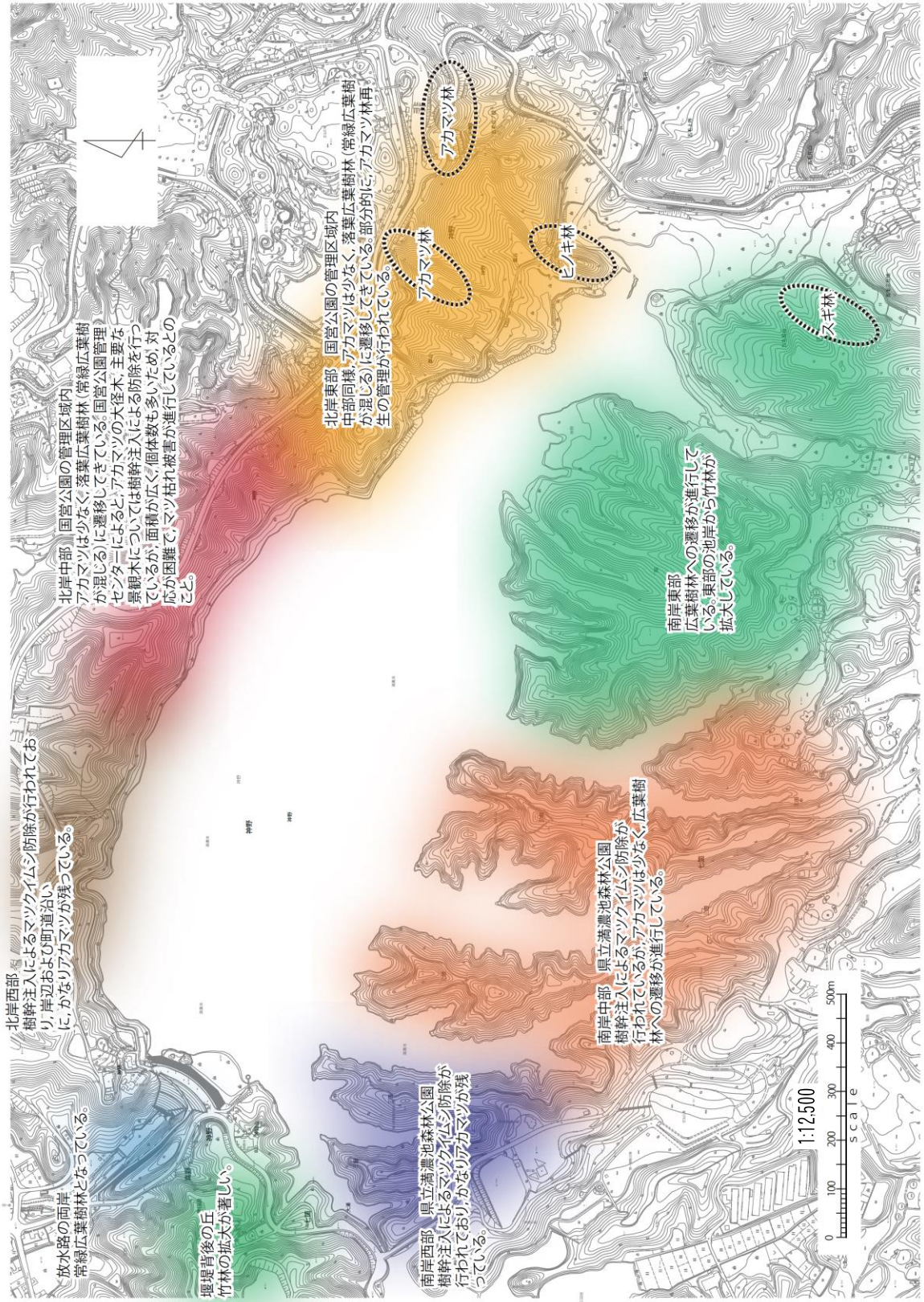
植生は景観を構成する主要な要素の一つであり、満濃池の景観にも周辺の植生が大きく関係している。また、植生は時間経過にともなって変化し、人の関わり方によっても影響を受ける。満濃池周辺も、かつてはほぼ全域がアカマツ林であったが、1980 年代以降、マツクイムシ被害の拡大により、アカマツ林から広葉樹林へと遷移してきている。満濃池周辺の植生の時代的な変化、および今後の植生管理の問題点については第６章に譲ることとし、ここでは、現在の植生の概況についてまとめておく。

なお、調査は 2018 年１月 26 日、２月 14 日に現地を歩いて観察し、また、2017 年 11 月 20 日と 2018 年２月８日にドローンを用いて空中写真を撮影した。場所によって植生の状況にやや違いが見られるので、以下、【第 15 図】に示す区域に分けて、植生の状況をまとめておく。また、主な地点の状況を【写真 30～49】に示す。

１．北岸西部

北岸西部にはかなりアカマツが残っている【写真 30】。池岸の町道を歩くと、水際(道路の池側)および道路沿いの山裾にアカマツの高木が多く残っていることが認められる【写真 31】。この区域は、町がマツクイムシ防除(薬剤の樹幹注入)をしており、その効果が表れているものと考えられる。ただし、場所によっては、コナラなどの落葉広葉樹、アラカシなどの常緑広葉樹が優占しているところもあり、アカマツは衰退傾向にあると言える。また、アカマツ林でも林内の下層にはネズミモチ、ヒサカキなどの常緑広葉樹が密生しており、アカマツ後継樹の生育は期待できない状況にある【写真 32】。

写真 30　北岸全景　西部(手前)にアカマツが残るが、中部～東部は広葉樹が優占する。(2017.11.20、ドローン撮影)



第15図　満濃池周辺の植生の概況（2018）

写真 31　北岸西部　岸および道沿いにアカマツが残る。(2018.01.26)

写真 32　北岸西部　道沿いにアカマツが残るが、広葉樹もかなり侵入している。(2018.01.26)

写真 33　北岸中部　岸および道沿いでもアカマツが少なく、広葉樹が優占する。(2018.02.14)

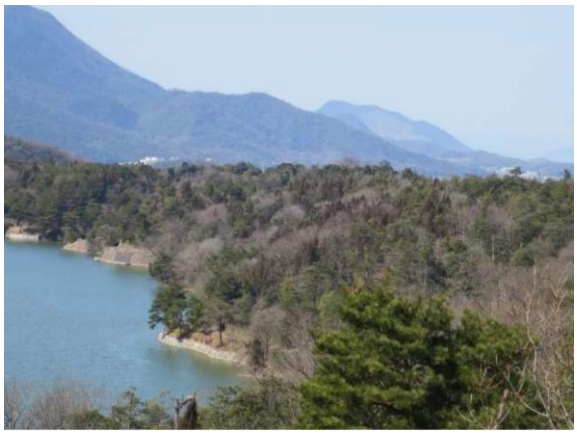


写真 34　北岸西部～中部(国営讃岐まんのう公園展望台から見る)　(2018.02.14)

2．北岸中部

北岸中部(国営公園の管理区域内)では、池岸および町道沿いでもアカマツが少なくなり、高木層は落葉広葉樹のコナラにアラカシ、ソヨゴなどの常緑広葉樹が混じり、中～低木層はネズミモチ、ヒサカキなどの常緑広葉樹が優占する状況になっている【写真 33】。国営公園の木道展望台から見ると、北岸西部にはアカマツが多く残っているが、中部になるとアカマツが減って落葉広葉樹の割合が多くなっていることが認められる【写真 34】。国営公園管理センターによると、アカマツの大径木、主要な景観木については薬剤の樹幹注入でマツクイムシ防除を図っているが、面積が広く(個体数が多く)、防除できない個体も多いため、マツクイムシ被害の進行を止めることは難しい。ここ数年、毎年 100～300 本程度の枯死木を伐倒処分(チップ化、焼却)しているとのことである。

3．北岸東部

北岸東部(国営公園の管理区域)になると、アカマツがさらに減少し、ほぼ全域がコナラ、アベマキ等の落葉広葉樹、アラカシ、クスノキ、ソヨゴ等の常緑広葉樹が優占する広葉樹林に遷移し

写真 35　池の東部　北岸(右)、南岸(左)とも広葉樹が優占する。(2017.11.20、ドローン撮影)

写真 36　北岸東部　道沿いも広葉樹が優占する。(2018.02.14)

写真 37　北岸東部　ヒノキ林、中腹から上は管理がなされているが、裾はなされていない。(2018.02.14)

写真 38　北岸東部(対岸から見る)　ほぼ落葉広葉樹林。尾根にアカマツ林が残る。(2018.01.26)

写真 39　北岸東部　写真 36 のアカマツ林の中景。(2018.02.14)

ていることが認められる【写真 35、36】。ただ、尾根部を中心に国営公園が「アカマツ再生林」として、マツクイムシ防除(薬剤の樹幹注入)および下草刈りをしている個所があり、ここはアカマツ林が残されている【写真 38、39】。

また、北岸の東端に近い半島部にヒノキ林が見られる【写真 35】。国営公園の管理区域内(半島の中腹から上部)では、間伐・下草刈等の管理がなされているが、裾の池岸部は管理がなされておらず、もやし状のヒノキが密生する状況である【写真 37】。

４．南岸西部

南岸西端の岬にはアカマツが多く見られる【写真 40】。ここは香川県満濃池森林公園の区域内であり、マツクイムシ防除(薬剤の樹幹注入)が行われており、その効果が表れていると言える。部分的には落葉広葉樹も見られる。

５．南岸中部

ここも香川県満濃池森林公園の区域内であり、２つの岬が池に向かって突き出ている。岸沿いに遊歩道が設置されており、この道沿いにはアカマツの高木が見られる所もあるが【写真 41】、道沿いでもアカマツが姿を消している所が多い【写真 42】。岬の大半がコナラ、アベマキ等の落葉広葉樹にクスノキ、アラカシ、ツバキ等の常緑広葉樹が混じる広葉樹林になっている【写真 43】。森林公園管理者(香川県みどり整備課)によると、ここでもマツクイムシ防除(薬剤の樹幹注入)を行っているとのことであるが、かなり早い段階でマツクイムシ被害が進行し、残されたアカマツが少なくなっているものと思われる。

６．南岸東部

南岸東部にはアカマツはほとんど見られず、コナラ、アベマキ等の落葉広葉樹にアラカシ、クスノキ、ソヨゴ等の常緑広葉樹が混じる林となっている【写真 44、45】。

なお、南岸東部の東端の岸辺では竹林が拡大している。一部に、スギの植林地が見られるが、管理放棄されており、広葉樹および竹が侵入している【写真 44、46】。

７．放水路両岸

堤体の背後、放水路の両岸の山腹は、アラカシを主とする常緑広葉樹林となっている【写真 47、48】。

８．堤体背後の丘

放水路の南、神野寺の西の丘であるが、竹林が拡大し、丘の頂上を中心に中腹から上を竹林が覆う状況になっている【写真 47、49】。景観的な問題と同時に、安全面(土砂災害)および環境面(野生動植物への影響)についても考慮する必要がある。

(増田 拓朗)

写真 40　南岸西部　アカマツが多く残る。(2018. 01. 26)

写真 41　南岸中部　道沿いにアカマツが残るが、林内は広葉樹林化が進んでいる。(2018. 01. 26)

写真 42　南岸中部　道沿いでもアカマツが姿を消している所が多い。(2018. 01. 26)

写真 43　南岸中部　広葉樹林化が進む。(2018. 01. 26)

写真 44　南岸東部（対岸から見る）　スギ林(管理放棄)に落葉広葉樹林が侵入し、さらに竹が侵入している。岸にアカマツが数本あり、かつてアカマツ林であった名残がみられる。(2018. 02. 14)

写真 45　南岸東部　落葉広葉樹および常緑広葉樹が優占する広葉樹林へ遷移している。(2018.01.26)

写真 46　南岸東部　スギ林に竹が侵入。(2018.01.26)

写真 47　堤体背後　放水路の両側は常緑広葉樹林であり、その南側の丘も常緑広葉樹および落葉広葉樹が優占する林であるが、竹林が拡大してきている。(2018.02.08、ドローン撮影)

写真 48　放水路両岸　常緑高樹林。(2018.02.14)

写真 49　堤体背後の丘　中腹から上は竹林、さらに竹林が拡大する状況。(2018.02.14)

第５章　人文的調査

第１節　古代

１．満濃池築造と修築

満濃池の築造年代については、寛仁４年(1020)の「讃岐国萬濃池後碑文」(『続群書類従』第三十三輯上 雑部)【資料３】によれば、満濃池は大宝年間(701 - 704)に讃岐国守道守朝臣により築造されたとする。しかし、史料上、初期の讃岐国国司は不明な点が多く、「讃岐国萬濃池後碑文」の年代を考慮すると、守某姓道守による築造については慎重に検討する必要がある。ちなみに、史料上最も遡るものは『続日本紀』「和同元年(708)三月十三日の条」の大伴道足である。

『日本紀略』「弘仁十二年(821)七月二十五日の条」【資料２】では、讃岐国司が朝廷に対し、満濃池修築の別当として空海の下向を奏上している。昨年より築堤を開始しているが、池が工大(広大)であり、人員不足により築堤工事に困難を極めていたため、讃岐国出身で民から父母の如く恋い慕われた空海を修築の別当として派遣することを求めたものである。しかし、ここでは、大宝年間の道守による築造は触れられていない。

両史料には築造に関する記述がある一方で、「萬濃池後碑文」の弘仁９年(818)の決壊は『日本紀略』の弘仁 12 年(821)の築堤に一致している。「萬濃池後碑文」の伝える大宝年間(701 - 704)の築造を否定することはできない。第３章第１節でみたように、満濃池の立地は、金倉川を水源と潅漑水路に利用することによって丸亀平野西部の旧多度郡・那珂郡への潅漑を行うことを意図したものと考えられる。同平野における近年の発掘調査において、７世紀末葉から８世紀初頭に条里地割に基づく耕地開発が急速に進展したことが明らかにされている(森下 1997)ことを考慮すると、間接的ではあるが、満濃池の築造時期は７世紀末葉から８世紀初頭に遡る可能性が高い。

弘仁 12 年(821)の修築後も満濃池は破堤している。「萬濃池後碑文」は仁寿元年(851)秋、大雨により満濃池をはじめ讃岐国中の池が決壊し、国司(権守)弘宗王は諸郡の池を修築を進めて、仁寿４年(854)に満濃池の修築を完了したという。

古代の史料における決壊・修築の記事はこの２回であるが、幕末の『讃岐国名勝図会』は、治安年間(1021-24)の改修の後の元暦元年(1184)の大洪水により破堤したあとは、修築されず田地となったという。

荘園などの中世の個別的な土地支配への移行によって、満濃池のような大規模なため池による潅漑事業の実施が困難になったとも考えられる。中世における断絶は、古代の満濃池の規模や潅漑範囲が広大であったことを間接的に示している。

以上のように、詳細は不明ながら、満濃池は大宝年間(701 - 704)に築造された後、数回の破堤と修築が繰り返されたと考えられる。度重なる破堤と修築の困難さは、満濃池に対する「工大(広

大)」な認識を生みだした要因となったと考えられる。

２．史料にみる古代の満濃池の認識

古代の満濃池の様子が記された史料として、12世紀前半の成立と推定される説話集『今昔物語集』【資料４】がある。「巻二十 本朝 附仏法 第十一 龍王、天狗のために取られたる語」と、「巻三十一 本朝 附雑事 第二十二 讃岐國満農の池をくずしゝ國司の語」に満濃池が登場する。「巻三十一 本朝 附雑事 第二十二 讃岐國満農の池をくずしゝ國司の語」には、「今ハむかし、讃岐国那珂郡に萬濃池とて大成る池あり。其池大師其国の人を愍みて人を役して築たまへる池なり。池のまハり遙に遠く堤はなはた高かりけれハ、池とハ覚へす。海なとのやうに見えたり。廣さハかなたに居る人のかすかに見ゆるほとなれは思ひやるへし。」として弘法大師空海の再築の事跡や堤が高いこと、池ではなく海のように広いことが記されている。

同様に「巻二十 本朝 附仏法 第十一 龍王、天狗のために取られたる語」でも同様に満濃池の由緒と広さを述べるが、「池の内底ひなく深けれハ大小の魚とも量なし。亦龍の棲としてありける。」として池が深く大小の魚と竜の住処となっているという。「巻三十一 本朝 附雑事 第二十二」では水面の広さと堰堤の高さのみの表現であったが、ここでは深さと龍の話が追加されている。龍は、仏教において雨神として請雨経典に竜王が説かれるものであり、満濃池のため池としての機能に由来するものと考えられる。また、「海なとのやうに見えたり」という池面の規模は、古代の堤高が「萬濃池後碑文」が伝える８丈(約24m)や、寛永の再築後の堤高13間(約23.4m)が現在のそれと大きな差違がないとすれば、現在の風致景観と大きな違いはないと考えられる。

第２節　中世

１．史料にみる中世の満濃池の様子

幕末の『讃岐国名勝図会』によると、元暦元年(1184)の大洪水による決壊後は、堰堤が修築されず田地となったという。

鎌倉時代末期の嘉元４年(1306)６月 12 日の「昭慶門院御領目録案」(『竹内文平旧蔵文書』)には、当時、後宇多上皇の院分国であった讃岐国の公領の中に「萬乃池」の地名と「泰(秦)久勝」の知行人の名がみえる。秦久勝は後宇多上皇の父亀山上皇の随身である。元暦元年(1184)、田地となった満濃池が院の御随身に給付されたと考えられる。

室町時代から戦国時代初めにかけての満濃池は、「賀茂別雷神社文書」に社領としてみえる。「賀茂別雷神社文書」のうち永正 17 年(1520)の満濃池の「御公用銭」をめぐる送状と請文では、耕作地化した「池内」、「池之内」と呼ばれた満濃池の年貢を、当時「国人」と呼ばれていた武士が請け負っていたことを示す。第３章第２節でみた池内に散布している土師質土器などの考古資料は、一端は耕地化した中世の満濃池に伴う資料と考えられる。

時期は下るが、慶長年間(1596 - 1615)の様子を描いた「讃岐国絵図」(高松市歴史資料館所蔵)

【資料 45】では村名を示す小判型の囲み中に「池内」とみえ、ここでも満濃池は描かれていない。

中世に関連する史資料として、鎌倉時代末期～南北朝時代初期の制作とみられる『志度寺縁起絵』がある。志度寺は本像建立を推古 33 年(625)、道場を天武 10 年(681)藤原不比等による建立と伝える古義真言宗の古刹であり、院政期には『梁塵秘抄』にみえる「四方の霊験所」の一つである。『志度寺縁起絵』は、草創譚と利生譚を描く絹本著色の６幅の縁起絵と７巻の縁起文からなり、第四幅と「縁起文 第四巻 当願暮当之縁起」【資料５・６】に満濃池が登場する。信仰心が薄かった猟師当願は、首より下が蛇となり、仲間の暮当に「只深き水の畔にみちひきて入れよ」と満濃池へ連れて行くように頼む。「深き水の畔」と「蛇」は、『今昔物語集』「巻二十 本朝 附仏法第十一 龍王、天狗のために取られたる語」の「龍」との関連が認められる。縁起文という勧進的性格もつ史料上の制約から、中世の満濃池の認識を示したものとはいえないが、『今昔物語集』との共通点は、耕作地となりながらも古代の満濃池に対する認識が鎌倉時代末期～南北朝時代初期まで継続していることは注意される。

第３節　近世

１．寛永の再築

元暦元年(1184)の大洪水による破堤後、長らくの間耕作地と化していた満濃池は、江戸時代初期に再築されることになる。讃岐生駒藩は寛永３年(1626)閏４月の大風雨とその後の旱魃による飢饉の対策として、西嶋八兵衛に満濃池の再築を命じる。西嶋八兵衛は、幼少であった生駒藩四代藩主高俊の仕置として津藩主藤堂家より派遣された客臣であり、石高増を目的に満濃池を含む領内 90 か所以上のため池の築造を進め、寛永 17 年(1640)の内高は 233,166 石に達した(「讃岐国郡村幷惣高覚帳」『香川叢書 第二』)。そして、寛永５～８年(1628～1631)には、満濃池の再築を行った。

「満濃池営築図」(個人所蔵)【資料７】は、寛永年間(1624 - 1645)の再築直前の満濃池の状態を示す資料であり、かつての池地には数軒の民家と道、耕作地の地割が描かれている(第６章第３節参照)。また、寛永５年(1628)10 月 19 日の鍬始め(着工)から、同８年(1631)２月の上棟式(完工)までの日付ごとの工程、奉行・普請奉行の氏名、那珂・宇多・多度３郡の水掛高、それと、西嶋八兵衛による池地の領主であった矢原正直との交渉が書き込まれている。再築工事は寛永５年(1628)10 月より始まり寛永８年(1631)２月に竣工した。矢原は、池敷の土地を提供するとともに工事完了後の寛永 12 年(1635)４月３日の生駒家家老連署奉書により 50 石を与えられ、池守に命ぜられている(『矢原家文書』【資料 48】)。

正保初年(1644)に江戸幕府が全国の大名に命じて製作・提出させた「正保国絵図」の「讃岐国図」(写本、国立公文書館所蔵)の注記によれば、「深九間半 水上三間半 竪五百六十間 横四百二十間」とあり、水深と水上の高さを合わせたものが堤高とすれば、寛永再築の満濃池堤高は 13 間(約 23.4m)になる(第６章第３節参照)。

讃岐生駒藩が改易となった寛永 17 年(1640)に幕府が那珂・鵜足・多度三郡の大庄屋に提出を命じた「満濃池水懸申候村高之覚」(鎌田共済会郷土博物館所蔵)によれば、満濃池の水掛りは３郡 44 か村、35,814 石２斗に及び、讃岐国石高の約６分の１に達するものであったことが知られる。生駒氏改易後、寛永 18 年(1641)には西讃岐５万３千石に山崎氏、翌 19 年(1642)に東讃岐 12 万石に松平氏が封ぜられると、両藩境の幕府領の苗田・榎井・五条３か村が満濃池の池御料とされ、幕府の代官が管理に当たった。

再築された満濃池は、木製の底樋であったことから、定期的に伏替(交換)する必要があり、堰堤を開削する大規模な修復工事が行われた。この普請は「揺替普請」と呼ばれ、早くも寛永 18 年(1641)には第１回目の揺替普請が行われ、これ以後、約 30 年目ごとに普請が行われた。揺替普請は、堰堤を開削して行う必要があり、普請は大雨や洪水等の危険性を考慮して前半と後半に分けて概ね 14、5 年ごとに行われている。

江戸時代最後の普請は嘉永年間(1848 - 1854)のことである。この普請では木樋を石樋に交換する大規模な工事であり、嘉永２・３両年と同５・６両年の２期に分けて行われた。総人夫数は 37 万人以上にのぼり、「満濃池御普請所絵図」(香川県立ミュージアム所蔵)には普請の様子が描かれている【資料８】。満濃池の普請は水掛かり村々(潅漑受益の村々)の大きな負担となったようであり、「行こうか、まんしょうか、満濃の普請、百姓泣かせの池普請」の古謡が残っている。この揺替普請に係る労苦は、課役の民衆に対して、満濃池の風致景観への特別な感興を呼び起こさせるものとなったと考えられる。

２．満濃池の風景の観賞

再築された満濃池の風致景観を取り上げた資料は、江戸時代前期から中期は少なく、江戸後期に増加する。延宝５年(1677)に中野天満宮祠官で高松藩に仕えていた小西可春による讃岐における最初の地誌的内容を持った書物である『玉藻集』【資料 11】では、『松葉名所和歌集』(巻一)の大和の十市池を満濃池として解釈し(十が千として万濃池の意)、藤原為家の『新後拾遺和歌集』(巻十五 戀歌五)の「今ははやとをちの池のみくりなは来る夜もしらぬ人に戀ひつゝ」を引用する。藤原為家の和歌は満濃池を詠んだものではないが、「和歌名所」として位置付けようとした最初期の資料である。文政 11 年(1828)に中山城山が高松藩に献上した『全讃史』(巻之十二 名勝志下)では「十市池 万農の池を云大和ニ同名あり 此池。弘法大師奉行して作れり。万ハ十千なれハ云へり」として、為家の和歌を引用しているのも『玉藻集』と同様であろう。

万治年間(1658-1660)に、高松藩初代御用絵師で狩野安信の門人である狩野常眞に制作されたと考えられる「象頭山十二景圖 二巻」【資料 14】は、満濃池を流れ出て金毘羅(象頭山)門前の金倉川を描くに止まる。延宝元年(1673)以降に制作されたと考えられる幕府奥絵師であった狩野安信、時信父子の「象頭山十二景圖」には、江戸中期の儒学者の林春齋(鷲峰)と林春常(鳳岡)が寛文 11 年 (1671) にまとめた「讃州象頭山十二境」の詩が添えられている。「讃州象頭山十二境」のうち「十二　萬農曲流」【資料 15】の林春常撰「清泒泛喬岑　長流旱則霖　弘仁餘帝澤　一畝當千金」

では、弘仁 12 年(821)の空海による修築の事績を讃えるが、満濃池そのものではなくあくまでも門前の金倉川の水流を撰するものである。元禄２年(1689)の寂本による『四国遍礼霊場記』においても、名所地としての金毘羅大権現で「讃州象頭山十二境」の林春常の詩を引用し、「河の源たる大池は弘仁帝の代に築く所也」と註を付しているのも同様である。

以上のように、江戸時代前期には『玉藻集』による和歌の名所としての位置付けが試みられるが、「象頭山十二景圖」や『四国遍礼霊場記』などは金毘羅門前の景勝に対するものであり、満濃池の風景の観賞には至っていないが、江戸後期に地誌の編纂が盛んに行われるようになるとこの状況に変化がみられる。

寛政 11 年(1799)の綾歌郡土器村庄屋の進藤政量による讃岐の風光・名所・旧蹟・産物を記した『讃岐廻遊記』(『香川叢書 第３』)【資料 13】では、十市池を満濃の池といい、方一里余として広大な池の規模を述べた後、弘法大師空海修築の事績や『志度寺縁起』(第四巻 当願暮当之縁起)の大蛇と化した當願による破堤、寛永年間(1624 - 1645)の西嶋八兵衛の再築の事績を紹介する。また、『玉藻集』で関連付けられた『新後拾遺和歌集』の藤原為家の和歌を添える。『玉藻集』で試みられた歌名所としての位置付けに加え、歴史的由緒との関連付けが試みられたものであり、藤原為家の和歌はこれ以後、盛んに引用されるようになる。

文化年間(1804 - 1818)に編纂されたと考えられる『金毘羅山名~~所~~勝図会』(『香川叢書 第３」)【資料 12】、『金毘羅山名勝図会』(写本、個人所蔵)【資料 16】は、金毘羅大権現参詣者向けの案内書である。著者は大坂の国文学者石津亮澄、挿絵は当時、琴平近くの苗田にいた、奈良出身の画家大原東野によるものと推定されている。『金毘羅山名勝図会』は『日本紀略』、『今昔物語集』を引用し、歴史的由緒付けを強調しつつ広大な水面に映る周囲の植生や背後の山並みなどの地形、堰堤上での春の行楽の様子を語り「山水勝地風色の名池」という。歴史的な由緒付けは『讃岐廻遊記』を踏襲するものであるが、史料の引用により強調を図るとともに周辺の山容などの地勢を詳細に語っている。挿絵は、堰堤と池面を中心として池岸の形状や背後の山容を一体的に描き、添えられた藤井高尚の和歌では複雑に入り組む池南岸の地形を「まのゝいけ池とはいはじうなはらの八十嶋かけてみるこゝちする」と表現する。

この広大な水面を中心として北岸の緩やかな池岸、南岸の複雑に入り組んだ池岸、なだらかな丘陵の遠景に聳え立つ讃岐山脈の山容が一体的に捉えた風致景観の観賞は、後の『讃岐国名勝図会』の地誌にも継承されるなど名所として広く喧伝された。

『讃岐国名勝図会』は、梶原藍渠とその子藍水による地誌で、史蹟名勝、神社仏閣、人物、伝承を紹介する。全 15 巻 20 巻のうち嘉永７年(1854)に前編５巻７冊が刊行されたが、後編・続編は稿本のみが伝わり、「後編　巻十一　那珂郡上」に満濃池が登場する。『金毘羅山名勝図会』と同様に『日本紀略』や「萬濃池後碑文」を引用するとともに、池乃宮や神野神社、神野寺など旧蹟についても紹介している。『讃岐国名勝図会』については、第６章 第３節を参照していただきたい。(信里芳紀)

引用・参考文献

讃岐国萬濃池後碑文 寛仁４年(1020)(続群書類従 第三十三輯上 雑部)
続日本紀 和同元年(708)三月十三日の条
日本紀略 弘仁十二年(821)七月二十五日の条(新訂増補国史大系)
讃岐国名勝図会 梶原藍渠・藍水 幕末～明治初期
今昔物語集 12 世紀前半(新編日本古典文学全集 37 今昔物語集③ 巻 20～26 小学館 2001、新編日本古典文学全集 38 今昔物語集④ 巻 27～31 小学館 2002)
昭慶門院御領目録案 嘉元４年(1306) 竹内文平旧蔵文書(香川県史８資料編 古代・中世資料 香川県 昭和 61 年)
賀茂別雷神社文書 永正 17 年(1520)(賀茂別雷神社文書第一史料纂集古文書編 続群書類従完成会 昭和 63 年)
讃岐国絵図 慶長年間(1596 - 1615)(高松市歴史資料館所蔵)
志度寺縁起 鎌倉時代末期～南北朝時代初期(新編 香川叢書 文藝篇 香川県教育委員会 1981)
梁塵秘抄 平安時代末期 後白河法皇編
讃岐国郡村幷惣高覚帳 寛永 17 年(1640)(香川叢書 第二 香川県 昭和 16 年)
満濃池営築図 寛永年間(1624 - 1645)(個人所蔵、香川県立ミュージアム提供)
矢原家文書 寛永 12 年(1635)(新編 香川叢書 史料篇二 香川県教育委員会 昭和 56 年)
正保国絵図 讃岐国図 正保初年(1644)(写本、国立公文書館所蔵)
満濃池水懸申候村高之覚 寛永 17 年(1640)(鎌田共済会郷土博物館所蔵)
満濃池御普請所絵図 嘉永年間(1848 - 1854)(香川県立ミュージアム所蔵)
玉藻集 小西可春 延宝５年(1677)(香川叢書第三 香川県 昭和 14 年)
松葉名所和歌集 万治３年(1660)
全讃史 中山城山 文政 11 年(1828)
象頭山十二景圖二巻 狩野常眞 万治年間(1658-60)
象頭山十二景圖 狩野安信・時信 延宝元年(1673)以降
四国遍礼霊場記 寂本 元禄２年(1689)
讃岐廻遊記 進藤政量 寛政 11 年(1799)(香川叢書第三 香川県 昭和 14 年)
金毘羅山名~~所~~勝図会 石津亮澄 文化年間(1804 - 18)(香川叢書第三 香川県 昭和 14 年)
金毘羅山名勝図会 石津亮澄 文化年間(1804 - 18)(写本、個人所蔵)
増補松葉名所和歌集本文編(笠間書院 1993)

資料2　日本紀略　弘仁十二年五月二十七日条［平安時代後期］『新訂増補国史大系』

（原文）

○壬戌、讃岐国言、始自去年、隄万農池、工大民少、成功未期、僧空海、此土人也、山中坐禅、獣馴鳥狎、海外求道、虚往実帰、因茲道俗欽風、民庶望影、居則生徒成市、出則追従如雲、今離旧土、常住京師、百姓恋慕如父母、若聞師来、必倒履相迎、伏請宛別当、令済其事、許之

（釈文）

○壬戌、讃岐国言（もう）す。去年より始め、万農池を隄（かぎ）る。工大にして民少なく、成功いまだ期せず。僧空海、此の土人なり。山中坐禅せば、獣馴れ、鳥狎（な）る。海外に道を求め、虚往実帰。これにより道俗風を欽（つつし）み、民庶影を望む。居ればすなわち生徒市をなし、出ずればすなわち追従雲のごとし。今旧土を離れ、常に京師に住む。百姓恋慕すること父母のごとし。もし師来たるを聞かば、必ずや履（くつ）を倒して相迎えん。伏して請うらくは、別当に宛て、その事を済さしむべし。これを許す。

資料3　萬濃池（まんのうのいけ）後碑文（のちのひぶみ）［建仁元年（一二〇一）］『続群書類従　第三十三輯上　雑部』

伝燈満位僧眞勝入寺東太（大）、此池者大宝年中、国守道守朝臣之所築也、旧記不注位名、空以嗟歎、古人伝云、此堤前世頽破、而（然脱カ）文書淪亡、其実難知、近曽弘仁九年流破、再下官使、三年内乃築成、仁寿元年之秋、天下大水超堤上、剋（少脱カ）之間、掃底而流、国中之池大小悉破、二年春有大疫、又荒饑、今茲旱魃八十余日、国虚耗、民無所拠、秋八月権守正五位下弘宗王、含朝之倫（綸）旨、莅残害之姓（百脱カ）、即巡諸郡、検察損物、兼愍愁苦之民間、閏幷破水内（門カ）盤石、八月朔、始発使夫二千余人、平築堤本、五日而上、起自十月上旬発夫千以下、輪転令築、此苦各築諸郡破堤、三年二月朔、大発約夫六千余人、限約十日、戮令築、十一日午剋、大功已畢、爰水内（門カ）猶高、不可無害、是以明年春三月、発夫二千余人、更増一丈五尺、通前八丈、其成事之躰、以俵薦六万八千余

枚、嚢□（沙カ）土填深処、由此其功早遂、声満天下、惣公夫単一万九千八百余人、所用物数一（十カ）千二万余束、凡見聞之中、只記大綱、細々之事不題注、老僧恭応国（請カ）諸、卒随三僧、自始迄終作法練行、於是依仏力、夫民無恙、国司欣悦、申上於官、聖主衿愍、幸施満海岳之恩、非本所望、然太守賢君、（宵カ）嘗衣勤公、肝食忘疲、口唱秘密真言之周遍、内外処分之内国楽、一方之中民富、可謂海岳者、（虚カ）庚実頼王祥

寛仁四年歳次庚申

（釈文）

伝燈満位僧眞勝入寺東大、この池は大宝年中、国守道守朝臣の築くところなり。旧記位名を注せず。空しく以て嗟歎（さたん）す。古人伝えて云く、この堤前世頽（すた）れ破ると、しかれども文書淪亡して、その実知りがたし。近曽（ちかごろ）弘仁九年流れ破れ、再び官使を下して、三年の内にすなわち築きなす。仁寿元年の秋、天下大水、堤上を超え、少剋の間、底を掃いて流る。国中の池大小悉く破る。二年春大疫あり。又荒饑す。今、ここに旱魃八十余日、国既に虚耗して、民拠るところなし。秋八月権守正五位下弘宗王、朝の綸旨を含み、残害の百姓に莅（のぞ）む。すなわち諸郡を巡り、損物を検察し、兼て愁苦の民間を愍む。閏八月朔、始て使夫二千余人を発し、平に堤本を築き、五日にして上る。十月上旬より起こりて、夫千以下を発し、輪転して築かしめ、ならびに水門の盤石を破る。この苦各々諸郡の破堤を築く。三年二月朔、大いに役夫六千余人を発し、限るに十日を約して、戮（あわ）せて築かしむ。十一日午剋、大功已に畢る。爰に水内猶高し。害なかるべからず。、是を以て明年春三月、夫二千余人を発し、更に一丈五尺を増す。前に通じて八丈、その事をなすの体、俵薦六万八千余枚を以て、沙土を嚢んで深き処に填む。これによってその功早く遂ぐ。声天下に満つ。惣公夫単一万九千八百余人、用いるところの物数一千二万余束、およそ見聞の中、ただ大綱を記す。細々の事題を注せず。老僧恭くも国請に応じ、三僧を率い随いて、始より終まで作法練行す。これにおいて仏力を蒙るによって、それ民恙（つつが）なし。国司欣悦して、官に申し上ぐ。聖主衿愍して、満海岳の恩を施したもう。本、所望にあらず。しかるに太守賢君、宵衣公に勤め、肝食疲れを忘れ、口に秘密の真言を唱え、内外、処分の内に、国楽しみ、民富む。海岳と謂うべきは、虚実王祥に頼る。

寛仁四年歳次庚申

資料４　今昔物語集［平安時代後期］

巻二十　本朝　附仏法　第十一「龍王、天狗のために取られたる語」

『新編日本古典文学全集三七　今昔物語集③　小学館　二〇〇一』

今昔、讃岐国、□□郡ニ、万能ノ池ト云フ極テ大キナル池有リ。其池ハ、弘法大師ノ、其国ノ衆生ヲ哀ツレカ為ニ築給ヘル池也。池ノ廻リ遥ニ広シテ、堤ヲ高築キ廻シタリ。池ナドヽハ不見ズシテ、海トゾ見エケリ。池ノ内底ヰ無ク深ケレバ、大小ノ魚共量無シ。亦竜ノ栖トシテゾ有ケル。

（訳）

今は昔、讃岐国□□郡に万能の池という非常に大きな池があった。その池は、弘法大師がこの国の民衆を哀れんでお造りになった池である。池の周囲ははるかに広々としており、堤を高く築き巡らしてある。とても池には見えず、海のように見えた。池は底知れぬほど深いので、大小の魚は数知れず、また竜の住処となっていた。

巻三十一　本朝　附雑事　第二十二「讃岐國満農の池をくずし、國司の語」

『新編日本古典文学全集三八　今昔物語集④　小学館　二〇〇二』

今昔、讃岐ノ国、□□ノ郡ニ満農ノ池トテ大キナル池アリ。高野ノ大師ノ、其ノ国ノ人ヲ哀マンガ為ニ、人ヲ催テ築給ヘル池也。池ノ廻リ遥ニ遠クテ堤高カリケレバ、更ニ池トハ不思エデ、海ナドトゾ見ケル。広サハ彼方幽ナル程ナレバ、思ヒ可遣シ。其ノ池築テ後不頽レズシテ久ク有ケレバ、其ノ国ノ人田ヲ作ルニ、旱魃スル時ナレドモ、多ノ田此ノ池ニ被助テ有ケレバ、国ノ人皆喜ビ合ヘル事無限シ。上ヨリ数ノ川共懸リタレバ、池ノ内ニ水湛テ絶ル事無カリケリ。然レバ池ノ内ニ大キナル小サキ多ノ魚有ケリ。此ヲ国ノ内ノ人、自然ラ構テ取ル事有レドモ、魚シ多ク有ケレバ、池ニ魚満テ期モ無カリケリ。

（訳）

今は昔、讃岐国［那珂］郡に満農の池という大きな池があった。高野の大師（弘法大師）がこの国の人のためを思って、大勢の人を集めて築きなさった池である。池の回りは延々と遠く連なり、堤も高いので、とても池とは思われず、海などのように見えた。対岸ははるかかなたかすかに見えるほどだから、その広さが思いやられよう。この池の堤は築造してのち、長い間くずれることもなかったので、その国の者が田を作るにあたって、旱魃の時でも多くの田がこの池のおかげで助かり、国の者は皆、心から喜び合っていた。池には上のほうから多くの川がそそぎ込んでいるので、いつも水が満々とたたえられていて絶えることがなかった。そこで、池の中には大小多くの魚がすんでいた。これを国内の者が盛んにとっていたが、魚が多いから、魚はいつも池に満ちて、尽きることがなかった。

資料５　志度寺縁起　当願暮当之縁起［鎌倉時代末期～南北朝時代］

『新編香川叢書文藝篇　香川県教育委員会　一九八一』

頸より下蛇の身となりて、鱗まことにあさやか也。暮當驚歎比類なくしていそき妻子に告けれは、各走來てこれを見るに、けふとくして、肥ち近くにおよはす、大蛇も強承に氣色なかりけり。さてもいかなる事をか心に思ると問けれは、只深き水の畔にみちひきて入よと申ける。云にしたかひて、當國に萬農池と云池に具して入ぬ。此時大蛇水上に浮て兩眼より涙をなかして、我一會場に接るといゑとも心根、□、三寶に不歸故に、いきなから忽に大蛇の身と成ぬれは、妻妾は、巳、偕老同穴の契を變し、子孫は悉に□親孝道の禮を失つ。但、汝は是人倫、吾は今畜類也。四生の苦海あらたにへたゝり六導の昏衢俄異る上は恨ところなし。しかあれとも暮當は多生曠劫より機縁ふかき人也。常に此池に臨て我有様お尋きくへしとて水底に入ぬ。

資料６　白杖童子縁起　当願暮当之縁起「絹本著色志度寺縁起」

［鎌倉時代末期～南北朝時代］（志度寺所蔵、画像提供香川県教育委員会）

作者は不明。鎌倉～南北朝時代初期の作。明治三十四年、国の重要文化財に指定された。志度寺の本尊十一面観音の由来と当寺の建立、再興のいきさつなどを、いくつかの伝説をもとに描いた縁起絵である。第四幅目に「白杖童子縁起・当願暮当之縁起」があり、暮当が満濃池にて蛇身となった当願から宝珠を貰う様子が描かれている。

資料６　白杖童子縁起 当願暮当之縁起
「絹本著色志度寺縁起」
［鎌倉時代末期～南北朝時代］
（志度寺所蔵、画像提供香川県教育委員会）

該当部分拡大

資料７　満濃池営築図［寛永年間（1624－1645)］

資料７　満濃池営築図［寛永年間（1624－1645）］
（個人所蔵、画像提供香川県立ミュージアム）

寛永年間の満濃池再築の以前の景観を示す資料。図には、中央の池の宮がある小山の左右にかつての池地からの川が描かれている。池地には数軒の民家と道、農地を区切るあぜ道が描かれている。元暦元年(1184)の崩壊以来、長きにわたって耕作地していた様子が窺える。寛永５年(1628)10 月 19 日の鍬始め(着工)から、同８年２月の上棟式(完工)までの日付ごとの工程、奉行・普請奉行の氏名、那珂・宇多・多度３郡の水掛高、それと、西嶋八兵衛による矢原正直との交渉過程が書き込まれている。

資料８　満濃池御普請所絵図［嘉永年間（1848 - 1854)］

資料８　満濃池御普請所絵図［嘉永年間（1848 - 1854）］
（香川県立ミュージアム所蔵）

多色刷り木版画。江戸時代末期作。「文山」の落款及び朱印があり、琴平に足跡を残した合葉文山の筆によるものであることがわかる。また、先述の通り絵図の上方空白部には和歌や漢詩が記されている。奈良松荘の歌に「嘉永六年といふとしの春」とあり、絵図中央下の底樋が石造となっていることから、底樋を木製から石造に改めた後半の伏替普請の様子が描かれたものと考えられる。

絵図の右手、神野神社の社前には池御料の小屋が建ち、それと対面する左方には高松藩・丸亀藩の小屋が並んで建っている。また、それぞれの小屋の横には、刻限を知らせるための太鼓が吊るされている。普請に関わる人足たちの役割は様々で、にぎやかな工事現場の様子が生き生きと伝わってくる。現場高所には、幕府の倉敷代官所の役人や藩側の代表者、庄屋と思しき人々が立ち並んでいる。また、家族連れらしい見物人たちの姿も見える。

資料９　満濃池絵図 天保八丁酉年［天保８年（1837）］（香川県立ミュージアム所蔵）

資料10　讃州那珂郡分間画図［江戸中期］（香川県立ミュージアム所蔵）

資料十一　玉藻集［延宝五年（一六七七）］『香川叢書 第三 香川県 昭和十四年』

本書は、中野天満宮の祠官であった小西可春（柳原小一郎）が延宝五年（一六七七）に著したもので、讃岐における最初の地誌的内容を持った書物である。

十市池　大和の名所也。松葉集に當國の中にも載たり。

新後拾遺和歌集　爲　家

今ははやとをちの池のみくりなは來る夜もしらぬ人に戀つゝ

（注）みくりなわ　三稜草縄　水草のミクリが水にただよいよじれて、縄のように見えるもの。こころが乱れる様をたとえたものか。

資料十二　金毘羅山名所勝図会［文化年間（一八〇四－一八一八）］『香川叢書 第三 香川県 昭和十四年』

本書は、金毘羅大権現参詣者のための案内書で、著者石津亮澄は大坂の人で和歌国学に名高い。絵は当時、琴平近くの苗田にいた大原東野によると推定される。文化年間（一八〇四―一八）に編纂されたものである。

萬農池

さや橋の流れの水源なり。

この池の事の国史に見えたるは、日本後記（日本紀略）曰く、弘仁十二年辛丑五月丙午朔、壬寅、讃岐国　言（もう）す、去年より始め萬農池を　隄（かぎ）る。工大にして民少し。成功いまだ期せず。僧空海、かくに（ママ）土人なり。山中座禅すれば、獣馴れ鳥　狎（な）れ、海外道を求め、虚して往き実に帰る。これにより道俗、風（ふう）を　欽（つつし）み、民庶、影（え）を望む。居ればすなわち生徒、市をなし、出ずればすなわち追従雲のごとし。今旧土を離れ、常に京師に住む。百姓恋うこと実に父母のごとし。もし師来たるを聞かば、必ず　履（くつ）を倒し相迎えん。伏して請うらくは、別当に充てその事を済ましめん。これを許せと云々。

又南海国史というものに言わく。

ここながら　こと経るだにも　ある物を
いとど十市の　里の秋風　清少納言

それ満農池は、弘仁年中大旱つづきしかば、諸国に勅して池を築かしむ。同十一年満農池を築ける。国民少くて功ならず。国守清原夏野奏す、沙門空海はもと当国の産にして、今皇都にあり。国民その徳を慕えること常に深し。ゆえに空海来たりなば、不日に成就すべしと、請によりて、夏野事を奏す。すなわち勅許ありて、同六月空海奉詔し、讃岐国に来たりければ、国人信従すること、ほとんど赤子の慈母を慕うがごとく集りしかば、不日にして堤なれり。その後は旱魃の時といえども、水絶うることなし。この物によって空海に新銭三万貫を給うてその功を賞す。空海これを分頒す。民大いに賀してますます空海を敬すること甚だし。しかるに空海国家安穏のため、精舎を建て神野寺と名付け、一宇の社を営みて神野神社と号して、その後延喜式神名帳に載せらる。しかるに寺は退転と見えて、今は寺跡と言い伝えし地、ならびに露地が峰などいえる処ひそかに殘れり。社は後人池の宮と唱えるも、池の堤にある社なるゆえいえり。

すなわち廿四社那珂郡のその一なりと云う。

又云わく、往昔この地に大蛇住みける。その跡深く掘れたり。その後空海池になされるといえり。ゆえに今もつて池底に地蔵菩薩尊像あり。今昔物語云わく、今は昔讃岐の国那珂郡に、満濃池とて大いなる池あり。高野大師（空海）、その国の人を哀れみ

て、人を促がして築き給える池なり。池の回りはるかに遠く堤高かりければ、池とは覚えず。海などのあると見えけり。中略。しかるにそ（某カ）の国司任国に有りけるに、国中の者館に集りて物語などしけるついでに、哀れ満農池には限りなき多き魚かな、三尺の鯉などもあるらんと語りけるを、守、伝え聞きて、欲しくと思い、いかにしてもこの池の魚を取らばやと思うに、池はるかに深ければ、人を入れて網を置けどもあたはず。所専（詮）池の堤に大いなる穴を通し、それより水を漏らして、水の落つる所に魚の入るべき物をかまえて、取らんとてかく計らいたれば、水走り出ずるに隨いて、その穴より多くの魚出でけるを、員（かず）ばかりもなく取りてける。かくて後に穴を塞ぎ設けれども、水の出ずる勢い強くして塞き得ず。穴次第に広くなるうちに、大いに雨降りて、池の上より流れ来たる河に水増さりて池に満ちて、その穴よりして堤ついに崩れて、池の水国中の田畠人家を損じぬ。多く魚は流れて、ここかしこにて人に取られけり。かかりし後は池の水少なくなりて、雨降るごとに土埋ずまりて、池の跡かたちもなかりけり。これを思うに、この人が欲によって池を失いたり。さるやんごとなき権者の、人を哀れみて築き給いける池を失いしだに、他に計りなき罪なるに、池の崩るるによりて多くの人の家を損い、多くの田畠を失いたる罪、いかばかりぞや。ましていわんや、池のうちにある若干の魚を取りたる罪、誰人か負わんや。きわめて益なき業したることなりと、国の人はその守を憎み誹（そ）しりける。その池の堤の形は今に見ゆるとなん、語り伝えたるとなり云々。上文のごとく、中ごろ洪水によりて堤切れて田地となれり。しかるに寛永二乙丑年、生駒高俊公この地を知らし給いし時、家士に西嶋八兵衛禄二千石。というものに仰せて再興すとぞ。伝えて曰わく、寛永五年、西嶋八兵衛尉（ゆきまさ）之尤は、勢州津の人、風姿岐嶷、志氣秀徹なり。書を善くす。讃州刺史高俊公の有司たり。しかして挙直錯柱、もって国風によくす。また山野海辺の新田数千町をなすなり。つぎに満農池二処池塘破壊して年久し。高俊公の命を得て之尤これを築く。田園秀実すと云々。この時の奉行福家七郎右衛門。知行三百石。下津平左衛門。知行四百石。

丁（戊辰の誤り）卯より鍬始め、辰（辛未の誤り）巳の年までに成就す。堤の根置六十五間、内法高さ三十五間、築留幅六間、長四十五間、池長さ九百間、横四百五十間、深さ凡十一間余、池回り四千五百間余、大口本樋長六十五間、樋の内横四尺、高さ二尺二寸、竪樋長十八間、樋の内横四尺、高さ一尺八寸、矢倉五ツ、但大口の戸の外すっぽん（槻詮のことか）数九ツ、穴一尺六寸、上のはちのこ（発水口）より下は少しづつ小さきなり。水掛りて三万五千八百石の余郡に渡り、五十余ケ村に分散して、田料よく熟実せしめて、国豊の水源親池なりと言い伝えたり。

萬農池、土人満農池という。故老伝えて云わく、人皇五十二代嵯峨天皇御宇、弘仁十二年壬（辛丑の誤り）丑年大旱す。弘法大師雨乞ありて、この処に池を築かしむ。名付けて十（とおち）市池と云う。また遠地の池ともかけり。思うに、この地南の方大山というより、こなた多くの山にて左り右に回りきたりて、その山々谷により落つる水を、野の方山の端のさし向かいたる山内の四十間ばかりの処に築き、その内を池としたるゆえの名にて、門内の池と云えるにはあらぬと。水源は千山聳（そび）え、屏風を立てたるかごとく、万谷より地腋（えき）を垂れ、池水常に堪え、池の周りはるかに遠く堤高ければ、池とは更には見えず、湖水のようにぞ見かけて、広さはかなたにいる人のかすかに見え、

野飼の馬は烏とみゆるほどなり。水洋々として百灘のごとく、万山影を逆しまに摸し、松柏草森々として谷を蔵し、雲朦(もうろう)朧としてつねに順雨を施こし、萬(漫)々たる霊水峩(が)々たる岸を争い、水鳥鯉鮒は驚衞に舞い遊ぶ。樋矢倉は番次並ぶ。水流千筋に別れて、田圃の料とし、堤に大師勸請し給う処の社有。式内なり。さればかかる大池なれば、四季つねに眺めありて、春の弥生は土人池見とて、小竹割子様のものを携え、朱の氈(かも)を敷きたるさまは、山つつ(ツツジ)じの色を奪い、糸竹の秘曲は山谷にこだまして、夕陽を限りて打ち連れ帰れる。まこと山水勝地風色の名池なり。

今ははや　とうちの池の　みくりなわ
来る夜も知らず(ぬ)　人に恋つつ
前大納言為　家

まののいけ　池とはいわじ　うなばらの
八十嶋かけて　みるここちする
藤井宿禰高　尚

十里波光、碧峰を倒す。眉山つつがなし、四時の容。忽然、時に有り、山風起こる。一面鏡中、百皺(しゅう)濃し。
琴　陵

神野神社
真野村にあり。後人池の宮という。延喜式廿　四座のその一なり。
三代実録云わく。元慶五年、萬農池神、従五　位下を授くとあり。相伝えて曰わく、むかし萬濃池を築きし時、鎮守の社造れり。これを神野神社と云えり。すなわちこれなりとぞ。

神野廃寺真野村。
相伝えて曰く、萬濃池を築きし時、空海上人この寺を草創ありしと云えり。今もその地に廃瓦残れるを、よりより(おりおり)土人堀り出せり。

資料十三　讃岐廻遊記［寛政十一年（一七九九）］『香川叢書 第三 香川県 昭和十四年』

本書は、綾歌郡土器村の庄屋進藤政量が著したもので、讃岐の名所などを述べている。寛政十一年（一七九九）に成立している。

十市池　満濃の池という。方一里余の池なり。真野村にあり。この池、往古弘法大師の築き給うゆえ、法の池ともいう。その後志度寺縁起にいえる暮当・当願の因縁によって、当願の大蛇盲となり、この池の堤を突っ切る。星霜やや移り久しく退転せしを、寛永四年当国の御先主生駒高俊公の時、勢州藤堂和泉守殿御家臣西嶋八兵衞と云う奇才の人、再び築きしとなり。和歌集に

今は早　十市の池の　みくり縄
来るよも知らぬ　人に恋いつつ
前大納言爲家卿

右、金毘羅え一里半、丸亀え四里、高府(高松)え八里。
神野神社　二十四社なり。この池の臺目(うてめ)に鎮座　なり。近年四国八十八ケ処の石仏、この池尻より池の内え建立す。池の内水懸り谷数九十九谷と云う。水掛高五万七千石也という。諸国湖水をのぞき池の部にては珍らしき池なり。

※（釈文）原文をもとに現代仮名遣いに直すとともに常用漢字に直した。漢文は返り点を参考にして読み下している。なお、一部は仮名を漢字に当てている。

↑資料 14　狩野常眞 象頭山十二景圖 二巻
十二 萬農曲流［万治年間（1658 - 1660)］
（金刀比羅宮所蔵、画像提供琴平町）

狩野常眞画。万治年間(1658-60)に製作されたと考えられる。象頭山は金刀比羅宮(金毘羅)が鎮座する山であり、豊かな自然に恵まれ、四季折々に素晴らしい景観を見せる。その中で特に優れた景色は、象頭山八景や十二景にまとめられ、江戸時代以降文学芸術作品の題材となってきた。

「象頭山十二景圖 二巻」は絹本著色２巻(甲・乙)から成る。２巻とも末尾に「法橋狩野常眞筆」の落款がある。「十二 萬農曲流」は満濃池から流れ出た金倉川が曲折しながら、集落近くを流れていく様が描かれている。金倉川は更に流れ下り、「十 橋廊複道」、「八 石淵新緑」にも登場している。狩野常眞［生没年不詳］は高松藩初代御用絵師で、狩野安信の門人である。

←資料 15　狩野時信 象頭山十二景圖
十二幅 十二 萬農曲流［延宝元年（1673)］
（金刀比羅宮所蔵、画像提供琴平町）

狩野時信画。延宝元年(1673)以降に制作されたと考えられる。「象頭山十二景圖 十二幅」は紙本著色 12 幅からなる掛軸である。法量は縦 120.6 ㎝、横 51.2 ㎝である。象頭山と門前の様子が描か

れている。幕府奥絵師であった狩野安信、時信父子が描いた十二景「左右櫻陣、後前竹園、前池躍魚、裏庭遊鹿、群嶺松雪、幽軒梅月、雲林洪鐘、石淵新浴、箸洗清漣、橋廊複道、五百長市、萬農曲流」にそれぞれ林春齊、林春常の漢詩が上左兵衛の筆により写されている。「十二 萬農曲流」は狩野安信が満濃池から流れ出た金倉川が曲折しながら、集落近くを流れていく様を描き、林春常の漢詩が上左兵衛の筆により写されている。

狩野時信［寛永 19 年(1642) - 延宝６年(1678)］は江戸時代前期の画家。狩野安信の長男。中橋狩野家を継ぎ、奥絵師となる。御所や江戸城本丸の障壁画などを描く。

林春常［正保元年(1644) - 享保 17 年(1732)］は江戸中期の儒学者。号は鳳岡、整宇。湯島聖堂の初代学頭。林羅山の孫。父、林春齋(鷲峰)と寛文 11 年(1671)にまとめた「讃州象頭山十二境」と題する誌巻が、金刀比羅宮に所蔵されている。

資料 16　金毘羅山名勝図会［文化年間（1804 - 1818)］

金毘羅大権現参詣者用の名所図会である。著者は大坂の国文学者石津亮澄、挿絵は奈良の画家大原東野である。原本は不明であり、写本２冊が残されている。

満濃池部分の挿絵は金毘羅別当金光院主琴陵宥怡が描いたとされ、藤原為家や藤井高尚、琴陵の短歌が添えられている。弘化４年(1847)の金毘羅参詣名所図会に先行して刊行されたと考えられるが、挿絵の構図は讃岐国名勝図会に近い。

挿絵には、藤原為家の和歌以外には、藤井高尚の歌「まのゝいけ池とはいはじうなはらの八十嶋かけてみるここちせり」が添えられている。

藤井高尚［明和元年(1764) - 天保 11 年(1840)］は国学者で、備中吉備津神社の祠官であった。30 歳のころ本居宣長に入門した。関西の本居宣長学派の中心的存在として活躍し、門人は 200～300 人に及んだ。代表作に、『消息文例』、『伊勢物語新釈』、『三のしるべ』などがある。讃岐へは２度訪れており、天保５年(1835)71 歳の時、４月に阿波から讃岐に赴いて詠んだのがこの歌である。

琴陵宥怡［天明４年(1784) - 弘化元年(1844)］は象頭山松尾寺(金毘羅)金光院主で、詩書画に優れた人物であった。

資料 17　象頭山八景 満濃池遊鶴［弘化２年（1845)］

「象頭山八景」は弘化２年(1845) ３月、象頭山松尾寺(現在の金刀比羅宮)金光院金堂入仏の記念に８枚１組の絵図として制作された木版画。前年、奥書院の襖絵を描いた京都の画家岸岱とその弟子岸孔、有芳また大阪の公圭らによって描かれた。

「満濃池遊鶴」は長山孔直画で、満濃池に渡ってきた鶴の群れを描く。堤の左側には神野神社が描かれ、その右側には余水吐から水が勢いよく流れ落ちる様子を描く。池の周囲には松が生え、水際には葦のような植物が生えている。満濃池周囲の山並みを写実的に描く一方、池の対岸を描かず、池の大きさを表現している。

資料16　金毘羅山名勝図会［文化年間（1804-1818）］写本
（個人所蔵、画像提供香川県立ミュージアム）

資料17　象頭山八景 満濃池遊鶴［弘化２年（1845）］（まんのう町所蔵）

資料 18　金毘羅参詣名所図会［弘化４年（1847)］

弘化４年(1847)年、暁鐘成の著作。挿絵は浦川公佐。金毘羅で弘化２年(1846)、金堂の落慶供養が行われた翌年、２か月ほど絵師同道で逗留し本書を綴った。全六巻。浪華の湊を出帆してから丸亀の湊に着き、金毘羅山に詣で、西は観音寺まで、東は屋島源平古戦場までの名所を綴っている。満濃池は丸亀湊、金毘羅山、善通寺の名所が記された第二巻に登場する。版木が長く残っていて、明治以降も度々再版されたようである。挿絵は「象頭山八景 満濃池遊鶴」の写しである。

資料 19　讃岐国名勝図会 萬濃池 池宮［嘉永７年（1854)］

梶原藍渠とその子藍水による地誌で、前・後・續３編のうち嘉永７年(1854)に前編５巻７冊が刊行されたが、後・續編は刊行されることなく草稿本が残る。「後編 巻之十一 上巻 那珂郡」に満濃池が登場する。挿絵は松岡調によるもので手前には満濃池や池宮である神野神社が、背景には大川山、五毛山、三頭山、高井ヶ原が描かれている。

文中には為家の和歌(『新後拾遺集』)、「萬濃池後碑文」、『日本紀略』、「龍王為天狗被取語」、「讃岐国満濃池頽国司語」(『今昔物語集』)が引用され、挿絵上部には藤井高尚の短歌、幸田惟親の漢詩、酒部正敬の短歌、藤春嶺の漢詩が添えられている。

徳永筆山［生年不明 - 文政５年(1822)］歌人。本名は顕仲。高松西新通で秋田屋という薬店を営む傍ら、別荘を構えて詩書を嗜んだ。

幸田惟親については不詳である。

酒部正敬［天保 11 年(1840) - 大正９年(1920)］は矢原理平の諱。かつての満濃池守の矢原家 69 代当主である。理平は、西湖又は雲窓と号し、文学を好み、漢学に通じて詩歌、華道を嗜み、土佐派の絵に優れるなど多趣多芸の文人として名を成した。明治 35 年(1902) から明治 41 年(1908)まで神野村村会議員を勤め、また仲多度郡郡会議員も勤める。満濃池堤防東端には嘉永７年(1854)の決壊後、明治３年(1870)の再築の顕彰碑「真野池記」が建つ。

藤春嶺[文化４年(1807) - 明治 18 年(1885)]讃岐出身の歌人で名は近藤梅外。藤井高尚に学び、別号は春嶺。

資料18　金毘羅参詣名所図会［弘化４年（1847）］（香川県立図書館所蔵）

資料19　讃岐国名勝図会 萬濃池 池宮［嘉永７年（1854）］（国立公文書館所蔵）

資料 20　象頭山参詣道紀州加田ヨリ讃岐廻并播磨名勝附［江戸時代末頃か］

発行年不明、幕末頃か。多色刷り版画で、大阪の船宿版元の引札である。大阪から丸亀までの航路や下津井(岡山県倉敷市)から丸亀、多度津へ渡る航路、紀州加田(和歌山県和歌山市)から阿波撫養(徳島県鳴門市)の航路が描かれている。象頭山と大川山の大川神社との間に満濃池が描かれている。池右横には鳥居が見え、赤囲みで「池ノ宮」と記されている。満濃池の上には「弘法大師築といふまんのうイケ」と記載されている。

資料20　象頭山参詣道紀州加田ヨリ讃岐廻并播磨名勝附［江戸時代末頃か］
（金刀比羅宮所蔵、画像提供琴平町）

満農池部分拡大